博士論文「‘Why Be Moral?’問題の再検討」（要約）

杉本俊介

本論文では、‘Why Be Moral’（なぜ道徳的であるべきか）という問い（以下、‘Why Be Moral?’問題）に答えようと試みる。H. A. プリチャードは‘Why Be Moral?’問題に答えようとする論者たちが陥ってしまうジレンマを指摘した。一つの答え方は「なぜなら、それが道徳というものだから」、「なぜなら、その行為が道徳的に正しいから」というものである。こうした理由は道徳的観点へのコミットメントを含んでいる。そのコミットメントがなければ、「それが道徳というものだから」と答えても納得のゆくものではないだろう。そこで、こうした理由は「道徳的な理由」（moral reason）と呼ばれる。もう一つの答え方は、道徳的観点へのコミットメントを含まない観点からの答え方である。たとえば、「なぜなら、我々がしたいと欲しているから」、「なぜなら、我々のためになるから」という理由がそれである。こうした理由は、非道徳的な観点からの理由、すなわち「非道徳的な理由」（non-moral reasons）と呼ばれる。道徳的であるべき理由は、道徳的な理由か非道徳的な理由か、いずれかであるように思われる。ところが、このとき、我々はジレンマに陥ってしまう。道徳的であるべき理由が道徳的な理由である場合、それは我々が求めている理由ではない。我々は、なぜ道徳の観点にコミットすべきかを求めているからである。このコミットメントを含んだ答えは論点先取の誤謬を犯してしまっている。他方、道徳的であるべき理由が非道徳的な理由である場合はどうだろうか。先行研究の論者たちは、様々なかたちでその理由は誤った理由だと言う。T. M. スキャンロンはこのジレンマを「プリチャードのジレンマ」と名づけている。

どうしたらこのジレンマを解消できるのか。本論文で提案するのは、道徳的であるべき理由が、道徳的な理由であるか、非道徳的であるか、いずれかであるという前提を誤った二分法として否定する道である。求められている理由は、道徳的でも非道徳的でもなく、そうした観点を超えた包括的な観点からなすべき理由である。その観点とは、実践理性（practical reason）の観点である。したがって、道徳的であるべき理由とは実践理性が道徳の観点にコミットするよう命じるから、というものになる。言い換えれば、本論文では、‘Why Be Moral?’問題に対して、道徳的であることが実践理性の要求だからだ、と答える。

本論文では、道徳的であるべき理由とは、道徳的であることが実践理性の要

求である、と主張する。この主張を支持するために、以下の論証を展開する。

１．道徳的であるべきである。
２．もし道徳的であるべきならば、道徳的であるべき理由が存在する。
３．したがって、道徳的であるべき理由が存在する。（１と２から）
４．もし道徳的であるべき理由が存在するならば、それは道徳的な観点からの理由（道徳的な理由）であるか、非道徳的な観点からの理由（非道徳的な理由）であるか、道徳的な観点でも非道徳的な観点でもなくより包括的な実践理性の観点からの理由であるか、いずれかである。
５．道徳的であるべき理由は道徳的な観点からの理由ではない。もしそうだとしたら、論点先取の誤謬を犯してしまう。
６．道徳的であるべき理由は非道徳的な観点からの理由でもない。もしそうだとしたら、その理由は誤った理由になってしまう。
７．したがって、道徳的であるべき理由は、実践理性の観点からの理由である。（３と４と５と６から）
８．実践理性の観点からの理由のうち最も適切な理由は、道徳的であることが実践理性の要求だからであるというものである。
９．したがって、道徳的であるべき理由とは、道徳的であることが実践理性の要求だからであるというものである。（７と８から）

まず、第 II 部では１から３までの部分について論じる。第３章では、１を否定する議論に反論する。そして第４章では、２を否定する議論に反論する。したがって、１と２は正しいと仮定し、３、すなわち道徳的であるべき理由が存在することを議論の前提にし、その理由とは何か、を考察してゆく。もちろん、３が否定されたとき、１か２かいずれかの仮定が間違っていることになる。

次に、本章のここまでの議論から４と５は真だとし、第 III 部では６、すなわち道徳的であるべき理由は非道徳的な観点からの理由ではないことを示す。ここで否定するのは、道徳的であるべき理由が自己利益の観点からの理由であるという可能性である。したがって、３と４と５と６から７、すなわち道徳的であるべき理由は実践理性の観点からの理由である、ということが導かれる。

第 IV 部では８、実践理性の観点からの理由のうち最も適切な理由は、道徳的であることが実践理性の要求だというものであることを示す。したがって、９、

すなわち道徳的であるべき理由とは、道徳的であることが実践理性の要求だからである、という本論文での主張が真であることが結論づけられる。

以下では、各章について、その内容の要約を記載する。

第Ⅰ部　‘Why Be Moral?’問題とは何か？

第Ⅰ部では、本論文が主題とする‘Why Be Moral?’問題がどのような問題なのかを明らかにする。

第１章　問題設定

本章では、‘Why Be Moral?’問題の問題設定を示す。１・１では、従来の‘Why Be Moral?’問題の議論のなかで、「なぜ…か」、「べき」、そして「道徳的である」という表現のそれぞれの意味と主語の省略という点に関して論者たちに共有されている最低限の了解を確認したうえで、本論文の‘Why Be Moral?’問題を提起する。提起するのは、我々にとって、そして私にとってでさえ、道徳を気にかけない行為よりも道徳的に正しい行為をすべき理由とは何か、という問題である。１・２では、この問題が抱えるジレンマを示す。道徳的であるべき理由は「それが道徳的というものだから」などの道徳的な理由か、「それを欲しているから」などの非道徳的な理由かいずれかであるように思える。このジレンマは、一方で道徳的な理由は我々が求めている理由ではなく、他方で非道徳的な理由は誤った理由だと考えられる、というジレンマである。ジレンマの標準的な解消の仕方として自己利益の観点からの理由に訴える方法の問題点を指摘し、もう一つの解消の仕方として、実践理性の観点からの理由に訴える解消法を提示する。１・３では、‘Why Be Moral?’問題に答えるため、本論文の議論の概要を示す。本論文では、道徳的であるべき理由とは、道徳的であることが実践理性の要求であるからだ、と主張する。

第２章　‘Why Be Moral?’問題小史

本章では、これまでの‘Why Be Moral?’問題の歴史的背景を明らかにする。２・１では‘Why Be Moral?’問題が古代ギリシアにまでさかのぼる問題であることを確認する。２・２では、中世においても‘Why Be Moral?’問題に関連する論点が議論されていることを示す。２・３では、近代哲学と‘Why Be Moral?’問題のつながりを明らかにする。２・４では、次章以降で検討する現

代の議論の流れを確認する。２・５で本章の内容をまとめる。

第 II 部　‘Why Be Moral?’問題の前提

第 II 部では、‘Why Be Moral?’問題を疑似問題だとする立場に反論し、真正な問題だと論じる。そのため、この立場を支持する論証が不十分であることを示す。

第３章　道徳的でなくてもよいという立場

本章では、道徳的でなくてもよいという立場を支持する論証が不十分であることを示す。この立場として知られるのが、フィリッパ・フットによる論文「仮言命法の体系としての道徳」での議論である。３・１では、この論文におけるフットの議論を検討してゆく。フットは、日常言語の「べき」の定言的使用からは道徳的であるべきだということが導かれないので、道徳的でなくてもよいと結論づけている。しかし、道徳的でなくてもよいと結論づけるフットの議論は不十分であることを明らかにする。

第４章　道徳であるべきだが、道徳的であるべき理由は存在しないという立場

本章では、たとえ、道徳的であるべきであっても、道徳的であるべき理由は存在しないという立場を支持する論証が不十分であることを示す。この立場をとる代表的な人物として、H. A. プリチャードと、初期の「よい理由アプローチ」（The Good-Reasons Approach）の論者たちがいる。４・１では、プリチャードがこの立場を擁護するために展開している二つの議論を検討する。特に難問なのが、「プリチャードのジレンマ」と呼ばれる第一の議論である。４・２では、初期のよい理由アプローチの論者たちの議論を検討する。彼らもプリチャードと同様に、‘Why Be Moral?’問題を立てようとするとプリチャードのジレンマに似たジレンマに陥ってしまうので、道徳的であるべき理由は存在しないと結論づけている。４・３では、このジレンマの標準的な解消法として、ニールセンが提案しバイアーが論じるアプローチ、すなわち非道徳的理由のなかでも自己利益に訴えるアプローチを紹介する。そして、もう一つのアプローチとして、実践理性の観点からの理由に訴えたアプローチを予告する。前者のアプローチは、第 III 部で、後者のアプローチは第 IV 部で考察する。

第 III 部　自己利益の観点からの理由

第 III 部からは、‘Why Be Moral?’問題に答えようとする試みを検討する。道徳的であるべき理由とは何か。第 III 部では、その理由は自己利益の観点からの理由であるという立場を検討し、反論する。

第５章　ホッブズ主義

本章では、道徳的であるべき理由とは自己利益の観点からの理由であるという立場であるホッブズ主義の議論に対して反論する。具体的には、カート・バイアーとデイヴィッド・ゴティエの議論に反論する。５・１では、バイアーの議論を検討し、「なぜ私は道徳的であるべきか」という問いに答えることができないことを示す。５・２では、この問いに答えようとするゴティエの議論を検討し、反論する。５・３では、さらにゴティエの立場を擁護するピーター・ダニエルソンの議論を検討し、反論する。５・４では、こうしたホッブズ主義の答え全般にあてはまる問題点として、（１）自己利益に基づく道徳が本当に「道徳」と呼べるものなのかが疑わしい、（２）「なぜ自己利益的であるべきか」という新たな問題を生む、（３）自己利益が規範理由たりうるかが疑わしくプリチャードのジレンマを解消できていない、という点を指摘し、ホッブズ主義のアプローチを批判する。

第６章　道徳と自己利益の調停

本章では、前章に引き続き、道徳的であるべき理由は自己利益の観点からの理由であるという立場を検討し、反論する。ただし本章では、前章のように道徳を自己利益に基づけず、道徳と自己利益を対等なものとして扱い、両者の調停を目指す試みを検討し、反論する。６・１では、この調停ができないことをヘンリー・シジウィックが「実践理性の二元性」と呼んでいることを確認する。シジウィックは、神的サンクションによって調停を試みているとも解釈できるが、この試みには限界があることを示す。６・２では、R. M. ヘアによる経験的な調停を検討し、反論する。６・３では、サミュエル・シェフラーによる潜在的な調停を検討し、反論する。６・４では、ロザリンド・ハーストハウスによる概念的な調停を検討し、反論する。６・５では、こうしたアプローチと前章のホッブズ主義との比較検討を行う。（１）自己利益に基づく「道徳」が本当に道徳かという問題も、（２）「なぜ自己利益的であるべきか」という問題も、

本章で検討したアプローチでは回避できるが、（3）プリチャードのジレンマを解消できない。そこで第 IV 部では、もう一つの解消法を試みる。

第 IV 部　実践理性の観点からの理由

第 IV 部では、道徳的であるべき理由は実践理性の観点からの理由であるという立場を検討する。

第７章　人生の意味

本章では、道徳的であるべき理由は実践理性の観点からの理由であるという立場を検討する。本章では、こうした理由の候補として人生の意味に訴えた‘Why Be Moral?’問題の応答を検討する。７・１では、ピーター・シンガーの『実践の倫理』最終章の議論を見てゆく。シンガーの試みは「推測の域を出ない」ものであり、人生の意味に訴えるアイデアを積極的に支持する議論を展開しているわけではないことを確認する。７・２では、人生の意味に関する様々な立場を検討し、人生の意味の観点を実践理性の観点として捉え直すべきだということを示す。

第８章　他者の利益

本章では、前章に引き続き、道徳的であるべき理由は実践理性の観点からの理由であるという立場を検討する。本章では、こうした理由の候補として他者の利益に訴える試みを検討する。こうした試みは、トマス・ネーゲルによって行なわれている。８・１では、ネーゲルの議論を検討する。ネーゲルによれば、個人を離れたどこでもないところから我々と世界を眺めるとき、我々には他者の利益を促進する行為者中立的な理由が見えてくるという。そして、ネーゲルは、唯一受け入れ可能な理由が行為者中立な理由であることを示そうとする。しかし、コースガードが批判するように、こうしたネーゲルの立場（実質的実在論）からの議論は確信の表明にすぎないと反論できる。

第９章　自律

本章では、前章に引き続き、道徳的であるべき理由は実践理性の観点からの理由であるという立場を検討する。本章では、こうした理由の候補として自律に訴える試みを検討する。こうした試みは、クリスティーン・コースガードや

スティーヴン・ダーウォルら一部のカント主義者がとるアプローチである。9・1では、コースガードの『規範性の源泉』での議論を検討する。コースガードの議論に対する反論として、（1）道徳法則としてどんな法則でも立てられてしまうという反論と（2）一人称に最終決定権を与えるのはおかしいという反論を示す。9・2では、ダーウォルの初期の議論を検討する。9・3では、ダーウォルの最近の議論を検討し、‘Why Be Moral?’問題に対して答えようとするダーウォルの論証にも問題があることを示す。

第10章　実践理性の一側面としての道徳

本章では、前章に引き続き、道徳的であるべき理由は実践理性の観点からの理由であるという立場を検討する。本章では、こうした理由の候補として、実践理性それ自体に訴える試みを検討する。その試みは、晩年のフィリッパ・フットによってなされている。10・1では、フットの晩年の著作『自然的なよさ』（*Natural Goodness*）と論文「合理性とよさ」での議論を検討する。フットは「なぜ道徳的であるべきか」の「べき」と「道徳」の関係を反転させるアイデアを展開している。このアイデアは実践理性と道徳の関係に関する一つの理解を示唆している。フットによれば、道徳は実践理性の一側面なのである。フット自身はそのために、『自然的なよさ』のなかで自然主義を展開しているが、本論文ではこの反転というアイデアだけ採用すればよいことを示す。次章以降では、このアイデアを展開し、‘Why Be Moral?’問題に答えてゆく。

第11章　「実践理性の観点」再考

本章では、前章に引き続き、道徳的であるべき理由は実践理性の観点からの理由であるという立場を検討する。本章では、そもそも「実践理性の観点から理由」などあるのかという懐疑論に応答する。11・1では、シジウィックの実践理性の二元性を再び取り上げて、実践理性とは何かを明らかにする。11・2では、実践理性の二元性における利己主義の問題を取り上げ、利己主義に対する反論を与え、実践理性の一元性を支持する。11・3では、最近の実践理性の観点に対する懐疑論としてデイヴィッド・コップの背理法による論証を検討する。コップの論証に対して、本論文では、プリチャードの議論までさかのぼり彼の「認識論とのアナロジー」に再注目することで、「規範的正当化に関する調和主義」という立場を提案する。この立場によれば、コップが指摘する循環を

問題なく受け入れることができる。

第 12 章　道徳的であるべき理由としての実践理性

本章では、これまでの考察をふまえ、次のことを主張する。道徳的であるべき理由とは、道徳的であることが実践理性の要求だからである。この主張の内実を明らかにしてゆく。この目的のため、あらかじめ本論文の主張に対する反論を用意し、それに答えてゆく。12・1 では、道徳的でも非道徳的でもない「べき」など存在するのか、という反論に答える。我々は第三の観点としての実践理性からの要求をそうした「べき」として理解することができるし、第 IV 部で検討した先行研究でもそう理解されていることを見る。12・2 では、なぜ第三の観点としての実践理性に従うべきか、という反論に答える。実践理性は実践理性を正当化することができ、「実践理性がそのように要求しているからだ」と我々は答えることができることを見る。12・3 では、「道徳がそのように要求しているから」は論点先取ではないか、という反論に答える。道徳は実践理性の必要条件であり、道徳が道徳を正当化するわけではない。「なぜ道徳的であるべきか」という問いに「道徳がそのように要求しているから」と答えるわけでなく、「道徳的であることが実践理性の要求である」と答えることを見る。12・4 では、実践理性の二元性の問題に答えていない、という反論に答える。倫理的利己主義に対する反論を与えることで、実践理性の一元性を支持する消極的な論証にはなることを示す。

本論文の結論

以上から、本論文では、道徳的であるべき理由とは、道徳的であることが実践理性の要求であるからだ、と結論づける。

補章　日本での‘Why Be Moral?’論争

本章では、いわゆる「永井・大庭・安彦論争」に焦点を当て、本論文の結論がこの論争に対してもつ含意を示す。第１節では、大庭の見解を見てゆく。第２節では、永井の見解を見てゆく。第３節では、安彦の見解を見てゆく。第４節では、本論文の議論がこの論争に対してもつ含意を示す。大庭の議論は、「実害なき密室での違反が可能な状況」をどのように理解するかが不明であり、仮

にギュゲスの指輪のような状況だと考えると不整合に陥ることを指摘する。また、「超越論的利己主義」を実践理性の観点として考えれば、その観点から道徳を優先する根拠を本論文で示せるし、「系譜学的考察」は本論文で見た史実にそぐわないことを示せるので、「道徳的でなくてもよい」という永井の立場を支持する論証にはなりえないことを示す。さらに、安彦が依拠するゴティエやヘアの議論には問題点があることを示す。したがって、少なくとも三者の主張よりも本論文の主張のほうが優位にあることを示す。